

国際交流事業

1 事業名 日独学生青年リーダー交流

2 必要性

平成8年の橋本首相とコール首相の日独首脳会談において、次世代を担う日独青年の交流が今後一層拡大されるべきであるとの共通の認識が確認された。平成9年6月のデンバーサミットにおいて、日独両国政府が共同で発表した「日独青少年交流の強化についての共同発表」に基づいて、日本とドイツの青少年団体等でリーダーとして活動する学生・青年等が、文化体験、意見交換、機関や団体で体験活動等を行うことにより、青年リーダーとしての資質を高めるとともに、日独の相互理解と交流の発展を図ることを目的とした「日独学生青年リーダー交流」がスタートすることとなった。

3 趣旨

本事業は、日独両国の青年リーダーが国際性豊かで、社会に積極的に参画していくリーダーとなることを目的に実施する。

ドイツと日本では青年の社会参画についての考え方や制度等に相違点があるが、今後より多くの青年たちが社会に参画する必要があるということは、両国の共通課題である。平成25年度は、日独の青年リーダー同士が中央と地方において意見交換や共通体験を行い、若者の社会参画の意義や姿勢について考えを深める事業を実施する。

4 共催

独立行政法人国立青少年教育振興機構

5 期日

受入期間：平成25年9月4日（水）～平成25年9月9日（月）（7日間）

（全体受入期間：平成25年8月28日（水）～平成25年9月10日（火）（14日間））

6 参加者（ドイツ団）

(1) 募集対象・人数

ドイツ連邦共和国に在住し、青少年団体等においてリーダーとしてボランティア活動や社会貢献活動を行っている者で、ドイツ政府・ドイツ側実施機関であるベルリン日独センターにより選出された者。人数は、団員（職業訓練学校生や社会人を含む18歳～26歳のドイツ人学生青年リーダー）16名、団長1名、計17名。

(2) 参加人数

団員16名、団長1名、計17名。

(3) 随行者

独立行政法人国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部 国際・企画課担当職員1名



(三浦真依子) 通訳 1 名 (阿部利永子)

7 講師等

(1) 講師

坂本弘治 (国立三瓶青少年交流の家研修指導員 自然観察)

柳楽天児 (国立三瓶青少年交流の家研修指導員 自然観察)

(2) 通訳

竹ノ内悦子 (日独スポーツ少年団同時交流)

上野敬子 (公益財団法人 中村元東方研究所研究員)

(3) ボランティア

法人ボランティア (島根大学生 7 名、島根県立大学生 9 名)

(4) 協力

大田市立鳥井小学校 5・6 年生

多根神楽団 15 名

ホストファミリー 16 家族



8 参加経費

実費のみ

9 事業の内容

(1) 事業の特色

平成 9 年より実施された本事業は、2 週間の滞在期間の前半 1 週間は都市部で行い(東京プログラム)、後半は地方受入施設で行う(三瓶プログラム)。地方受入施設でのプログラムを、地方施設と本部の積極的な連携協力により企画・運営し、国際交流事業のさらなる充実を図る。事業のテーマは「若者の社会参画」であり、ボランティアとの交流等を通して社会参画について考える。

地方施設のプログラムを企画するに当たり、特徴的な研修支援プログラムの体験や、日本文化体験、同世代の青年リーダー(法人ボランティア)との交流を組み入れる。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

本事業のねらいのひとつとして「参加者の資質向上と日独の二国間の人的交流の深化」とある。そのため三瓶プログラムでは、①人的交流及び日本の初等教育について ②日独のボランティア活動の紹介・意見交換 ③当施設の代表的なプログラム体験の 3 つの柱を考えた。

①人的交流及び日本の初等教育

人的交流として、ア 鳥井小学校との交流及び日本の初等教育について イ 法人ボランティアとの交流 ウ 日本の家族との交流 を企画した。

ア では、大田市立鳥井小学校に交流をお願いした。鳥井小学校では、日本の初等教育について理解を深めてもらうために授業参観や、清掃活動の見学を企画した。また、全校児童と給食を共にし、交流を深めた。また、ドイツ団と施設の法人ボランティアと一緒に企画立案したプログラムを5・6年生の児童に実施した。そのため、事前に法人ボランティアは鳥井小学校を訪問し、教頭から学校概要について説明を受けた。また、プログラムを実施するにあたり、施設内を見学して各教室等で活動可能な場所の確認を行った。そして、ドイツ団とのプログラムがスムーズに進むように法人ボランティアで役割分担をして、概要説明・活動可能な教室の見取図の作成をした。



イ では、法人ボランティアとして当施設で活動している島根大学、島根県立大学の学生16名を招いて、2泊3日の日程でドイツ団と共に生活することで日独の学生同士の交流を深めようと考えた。具体的には、ドイツ学生1名に日本の学生1名をバディとし、本施設の使い方や活動場所の案内、活動の補助等を行えるようにした。

ウ では、1家族にドイツ団1名がホームステイし、ドイツ団に日本の家庭を深く体験できるように、16家族を確保した。そして、ドイツ団のボランティア歴や趣向にあった日本の家族とマッチングすることで、ホストファミリーとより深く交流できるようにした。また、ホストファミリーに向けて事前に説明会を開催した。説明会では、本事業の概要を説明し、平成24年度のホストファミリーの体験談やアドバイス、活動記録写真を紹介し、安心してドイツ団を受け入れてもらえるように配慮した。

②日独のボランティア活動の紹介・意見交換

日独のボランティア活動の相違に気付かせるために、ボランティア活動の紹介及び意見交換を行った。一人ひとりの発言が活発に行われるように、ドイツ団と法人ボランティアをそれぞれ3班に分け、自己紹介を交えて、各自のボランティア活動の紹介をした。また、当施設で行っている「さんべ祭」を話題にし、企画で迷っていることや、アイデアの枯渇等について、ドイツ団からアドバイスを受けたりした。



後半は、鳥井小学校で行うプログラムの企画を行った。前半での意見交換の内容を生かし、お互いが青少年教育分野で活動する意義を踏まえてプログラムの企画を行った。

③当施設の代表的なプログラム体験

プログラム体験では、当施設の看板プログラムである「バウムクーヘン作り」と「登山」を企画した。このプログラムは過去2年間の本事業の感想でドイツ団から人気の高いプログラムである。バウムクーヘン作りでは、ドイツのお



菓子バウムクーヘンをみんなで一緒に作るという共通体験をして、楽しい雰囲気の中で交流を深めようと考えた。当施設の法人ボランティアの大半はこのバウムクーヘン作りをしたことがあるので、法人ボランティアがドイツ団に作り方の説明をし、一緒に作ることで交流を深められるようにした。

登山では、自然観察の講師を2名招いて、登山をしながら日本の自然にも理解を深めてもらうようにした。また山頂では、神話の舞台となった景色を見ながら国引き神話についての説明を聞き、その歴史を肌で感じてもらえるように企画した。なお、このプログラムも法人ボランティアがバディとして同行し、登山をしながらお互いの交流を深められるようにした。

(3) 広報のポイント

本事業では、ホストファミリーの募集を行った。ホストファミリー16家族を確保するために、平成24年度ホストファミリーを受けていただいた家族に今回も受けていただけるようお願いした。また、ホストファミリー募集のチラシを作り、当施設近隣の高校や図書館、国際交流に携わる諸団体にチラシを配り広報した。その結果、平成24年度から引き続きホストファミリーを引き受けていただいた家族が6家族、チラシを見て応募した家族が10家族あった。



(4) 日程表

	6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
9/4(水)					三瓶に移動				入所	三瓶のプログラム体験 ① バウムクーヘン作り *法人ボランティアと一緒に			歓迎夕食会		自由行動		宿泊 (三瓶)	
9/5(木)	起床	身辺整理	つどい	清掃	朝食	三瓶のプログラム体験② 女三瓶登山 *法人ボランティアと一緒に			昼食	三瓶法人ボランティアとの意見交換 企画作り①			つどい	夕食	企画作り②	自由行動		宿泊 (三瓶)
9/6(金)	起床	身辺整理	つどい	清掃	朝食	移動	大田市立鳥井小学校訪問			移動	ドイツ団 ミーティング *ホームステイ準備	ホスト ファミ リイ対 面 式	ホームステイプログラム					
9/7(土)	ホームステイプログラム																	
9/8(日)	ホームステイプログラム									ホストファミリー 交流会	ドイツ団 ミーティング *評価会準備	夕食 (食堂)	ドイツ団 ミーティング *評価会準備	宿泊 (三瓶)				
9/9(月)	起床	身辺整理	朝食	ドイツ団 ミーティング *評価会準備	評価会	昼食	退所											

(5) 運営のポイント

①担当者間の連絡・調整

本事業を運営するにあたり、国立青少年教育振興機構、ドイツ団団長、大田市立鳥井小学校、通訳と相談しながら進めていくことができた。本事業の当施設での実施は3年目で、本部担当者及び通訳も当施設について精通しているため進行しやすかった。また、鳥井小学校では教頭先生が全体窓口として対応されたので、相談しやすかった。

②ドイツ団と法人ボランティアのバディ制

三瓶プログラムでドイツ団と法人ボランティアがバディを組み、ドイツ団に三瓶の生活について説明することや、プログラム体験を一緒に行ったり、集合場所に案内したりしたことは事

業を運営していく上で大きな力となった。このバディシステムのおかげで、ドイツ団もスムーズに当施設の生活について慣れることができたと思う。

③法人ボランティアの自己紹介カード作成

昨年に引き続き、今年度もドイツ団向けに法人ボランティアのプロフィール一覧を作成した。この中には、法人ボランティアの所属や自己アピールなどを記載し、法人ボランティアとドイツ団との交流の話題作りになるようにし、今年度は各自が個性あふれる自作の自己紹介カードを作成した。

(6) 健康・安全管理のポイント

ドイツ団は日本滞在が2週間という長い期間であるため、疲れていることが予想された。そのため、プログラムは余裕を持って組むようにするとともに、ドイツ団の体調を確認しながら活動するようにした。

登山プログラムでは、①登山道の不備や倒木によるケガ、②熱中症のそれぞれについて対策をとった。①に対しては、職員が登山の下見をし、その中で登山道に張り出している樹木の枝の伐採と、下草の処理を行った。②に対しては、参加者に十分な水分の補給と、登山の途中で自然観察を加えることで適度に休憩しながら登山できるようにした。

バウムクーヘン作りでは、やけど防止のため全員に安全指導をするとともに、作業用手袋を提供し、安全に活動できるようにした。

健康面では、体調不良者には食堂に食事の対応を依頼した。体調不良により登山プログラムに参加できないドイツ団は、ボランティアと一緒に施設内でゆっくり過ごせるように配慮した。

(7) アンケートの満足度・おもな記述

三瓶プログラムから、主なドイツ団の感想を記載する。

<日独のボランティアについて>

- ・日本のボランティアについて新しい知識を得ることができた。
- ・ドイツのボランティア制度について新しい視点を得ることができた。

<バウムクーヘン作り>

- ・一番最初の交流として、とても良い機会だった。
- ・会話は多くなくても交流することができた。

<学校訪問・プログラム企画>

- ・日本の教育制度を、実際に見ることができたのは本当に良かった。この訪問によって、言葉が通じなくても沢山楽しめるし、お互いのことが知ることができた。
- ・とても楽しめた、この研修のハイライトであった。
- ・共同作業は考えを共有するのに生かされた。
- ・交流を通して、体験教育型プログラムのアイデアを新しく得ることができた。
- ・体験学習のプログラムはとても興味深く、ドイツでは共感を得られる企画であった。

<ホストファミリー>

- ・日本のライフスタイルを知ることができた。
- ・島根の歴史に触れることができた。
- ・数えきれいくらい多くの新しい体験をすることができた。

10 成果と今後の課題

<成果>

①人的交流の深まり

本事業の成果としては、ドイツ団と日本人の交流が深まったことがあげられる。ホストファミリーの感想にも、「特に子どもたちは彼から沢山の刺激を受けたと思います。期間がもう少し長かったらもっともっと話したり、色々なことが一緒にできたのに。」「家のこともよく手伝ってくれ、本当に息子が一人できた感じでした。」とあった。また、ボランティアとの交流については、「ペアを組むというアイデアは良かった。」「個人的にも交流を深めることができた。」などの感想がある。

②日本文化の体感

家庭の中に入り、日本の文化・習慣に触れながらより深く日本を知ることができ、日本社会の一面を体験できる絶好の異文化体験の機会となった。ホストファミリーにとっても、貴重な異文化体験であり、双方の出会いが人生の大きな財産となった。

また、当施設周辺には観光地等も豊富であるため、ホームステイ中に多くのドイツ団は各観光地を訪れて日本の歴史に直接触れることができ、日本文化の良さを再認識することができた。

③鳥井小学校訪問・交流プログラム企画作り

学校訪問はドイツ団にとっては、日本の教育を知り、自国の教育と比較する良い機会となった。また、鳥井小学校からは、「初めての国際交流を体験したがとても良かった、5・6年生のみの交流だったが、全学年で交流をすれば良かった」などの感想があった。

ドイツ団の感想から「プログラムの準備で得たものはとても役立つと思う」「自分の活動に生かせる新しいアイデアを得ることができた」「児童と直接触れ合うことができた」などの感想があった。

<課題>

ドイツ団は、日本滞在が2週間という長期間に渡るため、自己の体調管理について不安が残った。そのため、個々に柔軟に対応できるプログラムや体調のケアが必要であった。

法人ボランティアについては、当施設でのボランティア活動のため、意見交換の場面では意見が重なり、多方面からのボランティアとも意見交換できる場の設定が必要であった。

鳥井小学校訪問では、もう少し訪問時間をとることができればさらに満足できる活動できと思われた。

1 1 普及計画・普及実績

ドイツ団やボランティアの活動の様子を地元の石見銀山テレビで放映され、事業を広報することができた。

成果については当施設ホームページで紹介する。また、事業報告書を作成し、青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し成果の普及を図る。

(担当 藤田 守弘)